

# 根源悪的現象から他者の地平に向けて

宮本久雄

テーマが盛りだくさんで、どれだけ話せるかわかりませんが、「根源悪的現象から他者の地平に向けて」ということで、話させていただきます。

日本人として歴史の「悪」に向き合う

「根源悪」の問題を私が扱う根本的な動機は、日本人として、日本が第二次大戦中、アジアのいろいろな国に惨禍を与えたということです。私の肉親も外国で死亡したり、BC級戦犯になったりして、小さいときからタオルに「零」と血で書いたようなものを形見とし

て見たりしました。戦後（一九五二年）、『世紀の遺書』（東鴨遺書編集会）という本が出ました。A級をはじめいわゆる戦犯とされた日本人の遺書が載せてありまして、後に講談社から復刻版が出ました（一九八四年）。復刻版には、遺族が載せたくない遺書などはカットされていますが、私が見たのは全部載せられたものです（七百一篇）。それを、小学校の高学年から読んでいました（講演者は一九四五年生まれ）。

戦後の日本では松川事件とか下山事件（ともに一九四九年）、白鳥事件（一九五二年）など戦後の大きな怪事件

が立て続けに起こりましたが、中・高生時代になると、そういうものに強い関心をもちました。『夜と霧』（日本語版一九五六年）も読みました。学生による反ナチ運動「白いバラ」の記録である『白バラは散らず——ドイツの良心シヨル兄妹』（日本語版一九六四年）も出ました。ヒトラーの『マイン・カンプ』——『我が闘争』は、私が中学が高校のときに読んだときは訳文がひどくて、チンプンカンプンでしたが、最近の翻訳は随分改良されました。

それからバブルに向かってというか、神武景気（一九五四―五七年）からずっと経済がよくなつて、一時、日本全体がそういうことを忘れました。最近になって再び、映画「シンドラーのリスト」（日本公開一九九四年）とか、アイヒマン問題を扱った映画「ハンナ・アーレント」などが紹介され（日本公開二〇一三年）、白バラ抵抗運動についても多くの関連書籍が出版されるようになりました。だから最近、私がかつてもった大きな関心の第二の波が押し寄せているわけです。

先ほど申し上げたように、韓国や中国をはじめアジ

アのいろいろな国と関わる問題があります。日本人にあまり知られていないのはシンガポールです。シンガポールの中・高の教科書では最近まで、抑圧的な日本占領時代の華僑虐殺、神道の押しつけなどへの批判記事があり、韓国・中国よりもっと厳しいです。占領時に関する博物館もあります。しかし、日本人は若い世代を含めてあまり自覚がありません。シンガポールへ行った若い学生たちは、だいたいグルメツアーでパッと行ってパッと楽しく帰って来るので、そういう歴史に触れないわけです。けれども、向こうの人はそういう歴史を絶対に忘れないでしょう。そうしたギャップがあります。これは根源悪と何か関係のある現象だろうと思います。

しかし、それに関して、日本の哲学思想関係では十分な議論がなされていない。アジアと日本との歴史認識の問題が、すぐに感情的な議論になってしまっています。ですから、私が映画「ハンナ・アーレント」などを手がかりにして「根源悪」を考えようというのは、歴史的に議論がきちんと積み重ねられてきた西欧哲学、宗

教思想、そういうものがレファレンスとして非常に役立つからです。西欧思想を媒介として、東洋の自分自身を反省しようというわけです。少し迂回的な作業になりますが、議論の深まりの点では日本の思想家はかなわないようなものをもっていると思います。

## 1 「根源悪」を体現するアウシュヴィッツ

「根源悪」から始めたいと思いますが、これはカントの表現で「道徳律」に逆らう人間の自己愛的な傾向のことです。カントのいう定言的命法、「何々せよ」という絶対的な道徳的な掟というか道徳法則に逆らう自己愛ですね。道徳的な善に逆らって自分のしたいことをするという自愛心、これをカントは「根源悪」と名づけています。私の場合は、さらにそういうものを突っ切って根源悪を考えていききたいと思います。

ただ、悪だとか根源悪そのものは、あまりにも深すぎて定義できません。我々がそれに直面するのは根源悪に由来する何かの現象、フェノメノンを通してです。根源悪が、ある現象として表れてきた。その現象を取

り上げることによって、根源悪というものを考えることができるし、それを媒介に自分のもっているエゴイズムなどいろいろな問題を考えることができますということで、「現象」というものを考えていきます。現象というからには、ひとつではなくて、いろいろあるわけです。

私は、一番典型的な現象として、ナチス・ドイツ時代のアウシュヴィッツⅡビルケナウ強制収容所の殺戮装置に目を向けたいと思います。他にもいろいろな現象があると思うし、根源悪の現象は何かと見定めるのはやはり思索家、探究者のひとつの課題だと思いが、西欧の思想家が深刻に関わっているアウシュヴィッツを取り上げていききたいと思います。

## 全体主義を「合理的に」遂行

一番の手がかりになる思索家は、やはりハンナ・アレントです。彼女は『全体主義の起源』（一九五一年）の中で全体主義というものを考察しました。当時のソ連邦において、スターリンの粛清によって、シベリアに

送られたり処刑された人は何千万人にのぼり、どれくらいの人が消されたかわからないと言われています。あるいは、ヒトラーの第三帝国の全体主義。それから、規模は小さいにしろイタリアのムッソリーニの全体主義。日本では、それに対応するのが第二次大戦中の軍部独裁の全体主義。こういうものが具体的な歴史的象徴ですが、特にナチス・ドイツの場合はアウシュヴィッツなどの強制収容所は絶滅収容所（Vernichtungslager）といわれ、無用だとみなす人々を全部根絶やしにしようとする。ドイツ語の「ラーゲル（Lager）」というのは動物の檻の意味があるので、絶滅収容所は「絶滅の檻」という翻訳が一番適当かと思っています。ヒトラー自身が「絶滅戦争」と自分の戦争を位置づけて、他の国の人々を根絶やしにするという意図で戦争をしたわけです。そういう意味で、アウシュヴィッツというのはナチス・ドイツの全体主義を象徴している現象である。そして、いろいろな根源悪の現象の中で非常に典型的な現象であると言えると思います。

ここでは、全体主義が一番「合理的に」運営されて

いる、つまり西欧的な理性的人間の核心である「合理性」を使って人間自身を絶滅させていきました。ハンナ・アーレントによると、ナチス・ドイツの思想は「生きる資格がない」人間というカテゴリーをつくりました。その典型として、ユダヤ人をターゲットにした。他にも、平和主義者で反ナチの宗教者、共産主義者、障がい者、同性愛者、あるいはジプシー、最近ではロマリーニと言いますが、そういう人々も含めてアウシュヴィッツという「絶滅の檻」に入れて、人間性をとことん奪って殺戮した。その殺戮のプロセスが、非常に「合理的」であつたとされます。

「生きる資格がない」という表現自体、非常に概念的な思想内容をもっているわけですが、その「生きる資格がない」ということを実現するために、三つの手続きを踏んだと言われています。

ひとつは、まず「法的人格」を奪ってしまう。絶滅収容所に入れるために、法的に保護された人格、基本的人権などを全部剥奪し、住民票などから抹消してしまう。そして、無国籍というか市民としての権利を全

部剥奪する。私たちは、例えば投票権その他基本的な権利をもつていて、それなりに保護されていて、書類を用意すればパスポートを出してくれるし、日本国の成員として扱われるわけです。盗みや殺人など悪いことをすると、裁判にかけられますが、法的人格をもっているからこそ、裁判で裁かれるわけですし、弁護士もつきます。ところが法的人格が奪われると、裁かれるという権利もなくなります。つまり、裁判の結果、罰則を食らうとしても、それは法的人格が認定されているからであって、それが奪われれば、裁判所にさえ連れて行かれないのです。法廷で人間として扱われることがなくなる。そういう「法的人格を奪う」という段階があります。

二番目に、「道徳的人格」を奪う。道徳的人格というのは、「道徳的に完成された人だ」という意味ではなくて、「共に生きることのできる他者である」ということです。夫婦もそうで、なぜ旦那さんと奥さんが一緒にいるか。旦那さんにとって、妻は「共に生きるに値する」、これが道徳的人格をもっているということです。

奥さんにとっては、旦那さんは道徳的人格をもっている。東洋哲学研究所でいえば、共に研究をするに足る同志たちがいる。あるいは、お互いがそういう資格があると認め合っている研究者たちが共に一定の目的に向かって生きる。これは、道徳的人格を認め合っている一例です。それを奪ってしまつて、「おまえが生きる場所はない」と決めつけるのです。そういう意味では、いじめもそうです。よつてたかつて「このクラスで、おまえと一緒に勉強するのはイヤだ」「このクラスにおまえが勉強する場所はない」と言う。こうしたいじめも、道徳的人格を奪うことです。小から大までいろいろなレベルがあるわけです。

三つ目は、「生命がもつ自発性」を奪ってしまう。人間は生命的な自発性をもつおかげで、日々、朝起きては、あれをしよう、これをしようとなります。例えば、これから冬になると、おでんが美味しい時期で、おでんで日本酒を飲みながら生きがいを感じます。あるいは、恋もそうです。人を恋するということは悩ましいことです。生命の自発的なひとつの現れです。おで

# 人生の記憶も物語も奪う「忘却の穴」

ここでアイデンティティの問題が出てきますが、ア

んの例を出したのは、そういう生命的な自発性を奪う典型例として「パブロフの犬」という実験があるからです。普通、犬の前にごちそうを置くとヨダレを垂らして食べるわけですが、鈴を鳴らして訓練をし、鈴を鳴らしたときにだけ食べるように躰けるわけですね。結果として、鈴を鳴らしたときにヨダレが出るようになる。それは、人工的な犬をつくるということです。美味しいものがあつて自然にヨダレが出て食べるのではなく、鈴が鳴ったときにヨダレが出る。美味しいものを目の前に置いてもヨダレが出ない。そこまでも、生命的な自発性を取つてしまふ。このような仕打ちを受けると、人間はフラフラになって生ける屍になります。一番奪われるのは言葉の機能というか、トラウマが大きすぎて自分が誰であるのか、話すことができなくなつてしまふ。つまり、「自分は一体誰であるか」という物語を語ることができなくなります。

アイデンティティというと個人から集団のレベルまでいろいろあると思います。自分は何であるか。人間である。発達心理学から見て、人間というのは自我が確立していつて、ちゃんとしたアイデンティティをもった



ポーランド国立オシフィエンチム博物館（アウシュビッツ・ビルケナウ博物館）の展示から。収容の際の撮影では「幸福に暮らしている顔つきをせよ」と命じられたという。縦縞の服には「同性愛者」「ユダヤ人」「政治犯」「一般犯罪者」などと“分類”するための布製バッジがつけられている（from Wikimedia Commons）

人間になる。そういう説明は、人間を「何であるか」の集合としてアイデンティティという言葉を使います。客観的な学問では、そういう使い方です。

もうひとつは、物語的なアイデンティティです。これは精神分析でも使われています。自分の物語を語ってもらいます。物語の特徴は、「何であるか」よりも、「誰であるか」が中心であることです。物語の登場人物はみんな「誰か」というのが中心になっています。私の友人の精神分析医に聞くと、統合失調症の方でもやはり物語をもっているそうです。具体的には、人によっていろいろ違いますが、共通するのは「この世界は全部、自分に敵意をもっている」という物語だそうです。自分はいつも人に迫害されている、皆が自分に敵意をもっている、そういう物語です。その物語にしがみついていると、生きていくという状況がある。そこで、精神分析医はどういうことをやるかというと、クライアントに何か話をしてもらう。すると、大体いつも同じパターンで話をする。ところが、あるとき、すべての人が自分に敵意の眼差しを投げかけている中で、「あの人は自

分に微笑んでくれた」というようなことをチャットと言う場合がある。そこに分析医は目をつけて、「きょうは、いままでの物語と少し違う話をされましたね」、そこでストップします。その微笑みはどんなものであったか、その微笑みを延長していくと、まったく異なる世界が開けてくるのではないか。しかし、そこまでは言わないで、あくまで本人が自分で自分の物語を見出していくように手助けする。ですから、ものすごく時間がかかるわけです。そういうかたちで、ある物語を形成していくという療法です。

アウシュヴィッツの場合は、トラウマによって自分の人生の記憶も全部奪われる。つまり、自分が誰であるかということをもう思い出したくない。記憶も奪われ、言葉も奪われる。

「シヨア」という映画があります（一九八五年、日本公開一九九五年）。ご覧になった方もいらっしゃると思います。九時間半と、とても長い映画ですが、私は、三時間ぐらいに編集して学生に見せます。二回分の講義をこの映画にあてています。「シヨア (Shoah)」はヘブラ



イ語で「絶滅」とか「大災厄」という意味です。強制収容所で生き延びた人々がいろいろな経験語る映画です。ナチスの親衛隊（SS）がどのようにやって、ど

ういうメカニズムで、どういう合理性をもつて殺していったかが、あの映画でよく語られています。クロード・ランズマン監督は、あの映画を作るのに十一年かけたそうです。生き延びた人々は、ほとんどが体の頑強な人で、収容所に入れられても、すぐにガス室で殺されるのではなくて、自分の間は労働力として生かされました。こういう方々のなかに生き残った人がいたわけですが、あまりにもトラウマが大きすぎた。自分の周りに死体がゴロゴロしている。あるいは、自分の妻や娘、息子の死体を掘り出した。そういうトラウマが多すぎて、戦後、自分の家族のところに帰っても、自分の体験を一言も言いません。だから、ランズマン監督が行って、インタビューを少しずつやって経験の想起へ導きます。そのようにやって、だんだん思い出して、自分の物語を少しずつ語っていく。もちろん記憶は変形されていて、そのままではないにしろ、自分

の物語を形成することによって自分を取り戻していくのです。その場合、「物語る」ということが「癒し」になります。

例えば、ポーランドのヘウムノ絶滅収容所は、日本が真珠湾攻撃をした日に運営が開始された収容所ですが、少なくとも十五万人以上殺されて、生き残ったのは二人です。そういう人たちが少しずつ思い出しては語って、想起によってアイデンティティを取り戻す。自分は誰であるかを思い出す。そして、あの映画では、ある程度インタビューに答えています。

しかし、つらい話になると、話は絶句のために途切れます。例えば、アブラハム・ボンバという理髪師は、トレプリンカ絶滅収容所において、ガス室で殺される直前の女性の髪を切る仕事をさせられていました。その髪を利用して、ナチス・ドイツはマットとか毛布なんかを作ったわけですね。女性たちはみんな裸で、着物も全部取られて入って来る。そういう女性の髪を切る役目だった。あるときは、自分の故郷の女性たちが入ってきた。大勢が知り合いでした。彼には、いっしょに



働かされていた友人の理髪師がいたのですが、あるとき、その友人の妻と妹が入ってきたのです。……そこまで話して、彼はもう続けられなくなります。話せと言われても「できない」「もう無理だ」「もう勘弁してくれ」と言って、拒否します。やつとのことで、話したのですが、その友人はここがガス室であることを知っているから、一瞬でも長く妻と妹を抱きしめていようとしていたそうです。その話をするのが、アブラハム・ボンバさんには、とても耐えられないのです。それだけ深いトラウマになっている。

人間を生ける屍にしてしまうのが強制収容所です。先ほど言ったように法的人格、道徳的人格、生命性を奪ってしまった人間性を奪うということです。その究極は、その人の人生の物語を奪ってしまう。記憶する力も、語る言葉も奪ってしまう。自分が誰であるかを形成する力、もつと言えば人間の尊厳を形成する力を全部奪ってしまうということです。

ですから、ハンナ・アーレントは、アウシュヴィッツは「忘却の穴」であると言います。人間からすべて

の記憶、言語を奪い去って、誰であるかを忘却させる。その穴に落ち込んだら、その人がはじめからこの世に存在しなかったかのように消滅させられてしまう。そういう穴に仕立て上げられたのがアウシュヴィッツだということです。実際、ガス室に連れて行かれるときは、当人が持っている物は全部取られてしまいます。芸術家なら、自分が大切に持ってきた絵だとか、家族なら写真だとか、いろいろな物を全部奪われてしまう。着物も全部取られて、ガス室で殺されて、煙となってしまう。そして、その人を知っている友人とかも、いろいろなところで殺してしまう。ですから、その人に関する思い出となる品も、その人を記憶している人々も、その人のつくった作品なども、全部消していく。本人も煙にしてしまう。さらに、場合によっては強制収容所という「絶滅の檻」そのものを爆破して跡形もなくし、森林公園のように「きれいに」してしまったケースもあります。そして、かりに生き延びても、あまりにも悲惨な経験をしたので自分のことを語ることさえもできなくなってしまった。この忘却に、ナチス・ド

イツの最高の「合理性」が集約的に出ているわけです。

普通だったら、自分はこういうひどい経験をしたと、いろいろな人の前で言うでしょう。例えば、お兄さんにいじめられた妹が、母親に「お兄ちゃんがいじめたよ」と言う。この中にも身に覚えがある人もいるかもしれないませんが、私も妹をいじめたりしました。しかし、あまりにもいじめが強いと、トラウマとなって記憶を喪失してしまいます。これが加害者の思うつぼで、生き残った人たちが自分のことを何も言わない。これは、よくあることで、日本でもあります。私が経験したのは、映画「シヨア」を長野県のある村の図書館で四年間ぐらい見てもらったことです。そのときに出てきた村人の中に、中国戦線に出た将校や、フィリピンに行った衛生兵など、いろいろな人がいて、上映後の茶話会のように「自分はこういう経験をした」と言う。いま生きていればもう九十過ぎの方々ですが、家族には絶対しゃべらない。残念なのは、そのとき録音していなかったことです。カセットで録音していれば、随分違ったと思います。いまの日本では、そういう話

がほとんど残っていないことが非常に残念です。

ともあれ、アウシュヴィッツでは、そういうかたちで、記憶を語ることを全部はぎ取ってしまう。そのように、プロセスが非常に「合理的」に仕組まれている。それが「絶滅の檻」であるアウシュヴィッツです。かりに話したとしても、聞く一般の市民は「まさか、そこまでひどいことはないだろう」と思って無視したり、疑うわけです。ですから、たとえしゃべったとしても、生き残りの人たちは、あたかも異星にやって来たような感じを受けると言われています。

そういう意味で、アウシュヴィッツという現象は、人間を生ける屍にする。まったく役に立たない、生きる資格がない人間として扱う。もっと言えば、あたかもこの世界に生まれてこなかったかのようにしてしまう。完全にその人の記憶を奪い、その人がこの世界に生まれて存在したということさえも奪ってしまう。アーレントが言っていますが、普通の殺人者というのは、自分が殺人者であることがバレないために証拠を残さないよう苦心するわけです。自分が殺人者だとバレさ

えしなければ、遺体を残そうと何をしようとかまいません。地球の果てまで逃げてしまえばいいわけです。それに対し、非常に合理的で、広い地方を支配している全体主義国家においては、アウシュヴィッツがポーランドにあるように、ドイツだけでなく占領地域を含む非常に広い地域に「絶滅の檻」をつくっていて、消された人を記憶している人々をも消してしまふ。結局、その人がこの世界に生きてこなかったかのように全記憶を奪ってしまう。物語を全部奪ってしまう。「これが最高の殺人である」と、アーレントは言っています。

### 「何のために」がない虚無性

そこには、一人の人間をまったく無にしてしまうという一種の「虚無性」があります。アウシュヴィッツをつくるにしても、戦時中にこんなものをつくることは経済的には全然意味がないわけです。ユダヤ人を東欧などヨーロッパ諸国から貨車に詰めて運んでいくだけでも費用はかかるし、不経済です。強制収容所に送って、軍需産業とか何かに役立つような労働をさせるか

というと、たいていは、すぐに煙にしてしまう。人々はガス室内でもがき苦しんで、骨は折れるし、血は出るし、流動物が人間の体内から全部出てしまう。そうした後片づけの清掃も全部、労働用のユダヤ人がやるわけですが、彼らもまた最後は消されていく。そういう意味で、戦争のために何かを生産させたり、生産性の効率を良くしたりするために使う一般の強制収容所とは少し違う。無意味な、非常に虚無的な、もうそれ以上言えない一種のニヒルな力が働いている。そういう無目的な目的、虚無的な目的のためにつくられた装置としてのアウシュヴィッツも、それ自体が無意味なわけです。人殺しの装置ですが、何のために人を殺しているのか。「何のために」ということが全然ない。ただ殺すために殺すという、自己目的化されている。殺しを自己目的にする、ニヒルを自己目的化する装置であり、それ自体、非常に虚無的である。そういう意味で、アウシュヴィッツという現象は、もう何とも言えない虚無的なものであるというわけです。ですから、戦後、フランクフルト学派のアドルノが「アウシュヴィッツ

の後で詩を書くことは野蛮である」と言ったように、これほどの虚無を見た後で、芸術家も詩人も作品を作ることができるとかという問いかけが生まれた。人間がなぜ存在しているのかという存在性に関して言えば、アウシュヴィッツ以降はニヒルに直面して、誰も「存在」についてすらも語ることはできない。アドルノは、そういう言い方をしています。

つまり、ヨーロッパがそれまで蓄積してきた民主主義、ヒューマニズム、啓蒙、理性、いろいろな価値、文化・芸術というものが、アウシュヴィッツで徹底的に崩されたという認識が、戦後の思想家たちにとっての出発点であり、乗り越えるべき大きな壁であると言われます。特にユダヤ系のハンス・ヨナスやハンナ・アーレント、レヴィナスは、アウシュヴィッツの問題、あるいはアウシュヴィッツが突きつける虚無の審問を目の前に置いて思索をするのでなければ、ちゃんとした思想・倫理・芸術は出てこないと言う。それは、ある意味で現代まで通じている非常に重い問いかけです。私にとっては、アジアの戦争と、ヨーロッパの戦争の

悲劇が重なって、この重い問いが突きつけられています。これをどうするのかというのが、大きな思想的課題になっています。



靴の山。収容者はカバンや衣服、メガネその他、あらゆるものを収奪された（オシフィエンチム博物館展示／from Wikimedia Commons）

## 「悪の陳腐さ」——根源悪のもうひとつの現象

ハンナ・アーレントは後に、『イエルサレムのアイヒマン』という本を書きました（一九六三年、邦訳は一九六九年）。ユダヤ人問題の「最終的解決」すなわち絶滅計画が立てられて、何百万人ものユダヤ人がヨーロッパ各地から集められ絶滅収容所に送られました。その列車輸送の最高責任者が、親衛隊将校アドルフ・アイヒマンでした。彼は戦後、アルゼンチンに逃亡して隠れていましたが、イスラエルの諜報機関に逮捕されてイエルサレムに連れて来られ、裁判にかけられました。その裁判をアーレントが傍聴して、この本を書きました。これは、ハンス・ヨナスはじめユダヤ系の思想家にものごく評判が悪く、こてんぱんに批判されました。

アイヒマンの裁判を傍聴していて、アーレントはどのようなことを感じ、どのような評価をしたかというところ、アイヒマンは別に鉄砲でユダヤ人を殺したわけではなく、「机上の殺人者」と呼ばれている。つまり、何百万人のユダヤ人を貨車に乗せて強制収容所、殺戮の檻に集めるプランを、彼が責任者となって非常にうまく進

めた。だから、役人としては最高に合理的に務めた人です。ハンナ・アーレントは、アイヒマンと会う前は、彼の人柄について、すごく悪魔的な、底意地の悪い、悪の権化であるというような予想をもっていた。しかし、イエルサレムに行つて傍聴した結果、まったく逆の結論を出しました。何かというと、アイヒマンが体現しているのは、「悪の陳腐さ」であるということです。「イエルサレムのアイヒマン」には「悪の陳腐さについての報告」(A Report on the Banality of Evil)という副題が付いています。悪の凡庸さです。少し読ませていただきます。

私が悪の陳腐さについて語るのはもっぱら厳密な事実の面において、裁判中誰も目をそむけることのできなかった或る不思議な事実に触れているときである。アイヒマンはイヤゴードでもマクベスでもなかった。しかも（悪人になって見せよう）というリチャード三世の決心ほど彼に無縁なものではなかったろう。自分の昇進にはおそろしく熱心

だったということのほかには彼には何らの動機もなかったのだ。そうしてこの熱心さはそれ自体としては決して犯罪的なものではなかった。勿論彼は自分がその後釜になるために上役を暗殺することなどは決してしなかったろう。俗な表現をするなら、彼は自分のしていることが、どういふことか全然わかつていなかった。まさにこの想像力の欠如のために、彼は数ヵ月にわたって警察で訊問に当るドイツ系ユダヤ人と向き合って坐り、自分の心の丈を打ち明け、自分がSS中佐の階級までしか昇進しなかった理由や出世しなかったのは自分のせいではないということをくりかえしくりかえし説明することができたのである。大体において彼は何が問題なのかをよく心得ており、法廷での最終陳述において、「(ナツイ) 政府の命じた価値転換」について語っている。彼は愚かではなかった。完全な無思想性——これは愚かさとは決して同じではない——、それが彼があゝの時代の最大の犯罪者の一人になる素因だったのだ。このことが(陳

腐)であり、それのみか滑稽であるとしても、またいかに努力してみてもアイヒマンから悪魔的な底の知れなさを引出すことは不可能だとしても、これは決してありふれたことではない。

(大久保和郎訳)

このように言っています。

つまり、それまでのヨーロッパの人間論の中で、悪人というのは、アウグスティヌスもそうですが、人間の意志の中に悪魔的なものが潜んでいる、そのデモニッシュなものの原因となつて人間は悪いことをする、そういう典型的な説明があるわけです。あるいは、悪いことをするのは、社会的ないろいろな要因からだとか、幼児体験とか、国の歴史的な伝統、あるいは人間関係のあり方とか、悪がそこから出てくる原因についてはいろいろな説明が可能です。そういうなか、アーレントは、悪人あるいは悪人が行う悪というのは、ある深さから生じてくるのではなく、まったくの表層にしかすぎないと言う。その表層性を、無思想性や判断

力のなき、凡庸性と言っているわけです。

『全体主義の起原』では、先ほど言いましたように、機構としてのアウシュヴィッツがもっている「目的のないニヒル性」、あるいは、そこに生きる人間——SS将校らがもっている何か悪魔的なニヒル性というものが問題になったわけです。一転して、『イエルサレムのアイヒマン』では、まったく想像力を欠く無思想性というものが悪であるとする。これが悪の「陳腐さ」、バナリティ (banality) です。

アイヒマン自身はどのような自己弁護をしたか。日本の極東裁判（極東国際軍事裁判／東京裁判）でもそうですが、「自分は巨大な機構の歯車にしかすぎなかった。上に命令されたことをそのままやっただけで、自分に責任はない」、そういう弁解の仕方です。大きな機構の中で何か悪いことをやった人は、ほとんど裁判の席で「自分は歯車にしかすぎない」と自己弁護するわけです。

それに対して、アーレントは「人間というのは、裁きを受ける権利がある。なぜか」と、人間は自由

だからだ」と言います。アーレントが出す例として、アントン・シュミットというドイツ国防軍の軍曹がいます。彼は戦争中にユダヤ人たちを助けるために様々な努力をしました。最後は見つかって処刑されています。映画「シンドラーのリスト」のオスカー・シンドラーみたいな人物です。アウシュヴィッツでも、ポーランドのコレベ神父みたいに、人の身代わりになって死んでいった人もいます。このように、人間の良心のきらめきというものが光を放っている事例が幾つもあります。

ハンナ・アーレントが言うには、人間は自由である。ある意味で、どんな人間も、状況に対して自由に対応する責任性をもっている。だから、ある機構がどんなに巨大であっても、ある個人を歯車にすぎないと言ってしまおうと、その人から自由や法的人格を奪ってしまふことになる。もつと言えば、道徳的人格も奪ってしまふ。つまり、その人を歯車として認めれば、人間として共に生きるに値しない人間ということになってしまいます。法的人格も道徳的人格も奪うことになる。



その根底は、人間的生命の自発性としての自由も奪ってしまふことになる。だから、そういう理論は認めない。どんな人間にも、裁判の席に立つ責任と価値がある。ですから彼女は、アイヒマンの場合も、そういう意味で齒車論は認めないわけです。

彼の悪の問題というのは、まさにバナリティ、つまり、善悪を判断したり、どういうことが行われているのかという想像力や思考力が全然ないことである。だから家庭に帰れば、良いお父さんであったり、普通の一般市民である。しかし、他者への想像力とか判断力がない。それが、彼のもっている「陳腐な」悪である。悪魔的な意志などというのではなく、誰もが陥る可能性のある悪である。

アイヒマンについて言われた「悪の陳腐さ」と『全体主義の起源』で指摘された「悪魔的なニヒル性」との違いについて、いろいろな評論家が違うレベルで論じ、批判しています。しかし、悪の凡庸さというだけで、アーレントは根源悪の全部を語り尽くそうとしたわけではありません。こういう「悪の陳腐さ」というのは、

まさに『全体主義の起源』で言われた「全体主義支配」というものを前提として、そこから生じてきたと考えることもできます。ですから、「アウシュヴィッツ」のニヒルとアイヒマンの「悪の陳腐さ」というのは、『根源悪のふたつの現象』と見ることが出来るわけです。

## 2 全体主義の思想的温床「存在－神－論」

さて、そういう根源悪を考える上で、全体主義的特徴をもつ思想として「存在－神－論」(Ono-theo-logia)というものを取り上げてみます。ハイデッガーやレヴィナスとか、フランスのジャン＝リュック・マリオンとか、いろいろな哲学者が「存在－神－論」について議論をしています。これは、「存在論(onto-logia)」と「神論(theo-logia)」を合わせた言葉ですが、その一番のモデルをハイデッガーはアリストテレスに求めます。これは、アリストテレス哲学のひとつの解釈です。アリストテレス哲学は豊かで、デカルト、ニーチェ哲学の解釈のように、いろいろな見方が可能です。ただ、ある視点を取ると「存在－神－論」と理解できるわけです。

ヨーロッパ史を貫くその根本的性格

それでは「存在―神―論」とは、どのようなものでしょうか。まず、すべてを取り込める普遍的な概念を立てます。すなわち、「存在するもの」という最も普遍的な概念によって世界全体を、すべてのものを思考します（存在論）。だから、「無」も存在の欠如として「存在」の中に入るわけです。次に、最高原因としての存在を立てる。「存在としての存在」の中で一番存在性をもっているものは神である。「不動の動者」とか「第一原因」「第一目的因」とかいろいろ言いますが、すべてのものがそれを目的として動いていく。あるいは、すべてのものを動かしていく第一作動力。これが、アリストテレスの言う神様です（神論）。

「不動の動者」というのは面白くて、ちょうどある絶世の美女に向かつていろいろな男性がおのずから動いていくようなイメージです。絶世の美女は自分では動かずに、鏡を見て「鏡よ、鏡よ、教えておくれ。世界で一番綺麗なのは誰？」と言っているわけです。彼女はそうやっているだけで、男性がみんな彼女に向けて

動いていく。だから、本人は動かないで他者を全部動かす。そういう目的の立場において同時にすべてを動かす作動因という意味で「不動の動者」と言います。昔、哲学の勉強をやっているときに、美人に会うと、皆が「あれは不動の動者だな」と言っていました。とにかく、先の「存在論」と「神論」を併せて「存在―神―論」というわけです。そこでは、その「不動の動者」が「存在としての存在」全体を、目的因と作動因というかたちの因果関係の中に全部収めている。その因果関係の中に収めきれないものは、無意味な、価値づけされないものとして放り出されてしまう。これは、ある意味で全体主義的思想システムでしょう。

このモデルを現代にもってくると、デカルトの場合には有名なコギト・エルゴ・スム——「我思う、ゆえに我あり」で、彼にとつての第一原因、神の座を占めるのは「理性」です。つまり、計算し表象する理性。表象する（vorstellen）というのは本来、「前に置く」ということです。どのように置かかという、対象として置く。その場合、数量化された計算される対象として置

くわけです。理性によって置かれたものというのは全部、数量化されるものである。数字で置き換えられて、数式で表現されるもの。近代自然科学の法則というのは全部、数式で表されますね。そういう数量化されるものが、この世界の最も普遍的な存在者——アリストテレス的に言えば、「在りて在る者」になるわけです。デカルトは理想として普遍的な数学を構想した。世界全体を自然科学の法則体系として体系化しようという野心をもっていた。これはガリレオからずっと続いているわけです。こうして「理性」と「普遍的な数量化されたもの」に拠って世界全体を了解し、支配するシステムができあがります。

ニーチェの場合は、神の座を占めるのは理性ではなく、「権力への意志」です。「力への意志」。ありとあらゆる弱者あるいは他者の生命を奪い取って、無限に自分の生命力を増大させていく、それに向けて働く意志。これが、神様になります。その意志のもとに、この世界というものが動かされていくわけです。そういう「力への意志」のもとにあるものは、目的も意味も何もない。

く、ただ生成し、永遠に生成するものです。生にとって、生以外の目的はない。そして、初めもなく終わりもなく、しかも一回限りのものでもなく、同じものが同じ仕方でも繰り返され、永遠に反復される。だから、そこには、かけがえのない意味もない。希望も革新もない。永劫回帰の思想です。ニーチェにとって、生成こそが存在するものであり、永劫回帰において存在するとされた「生成」こそ、新たな「在りて在る者」つまり最も普遍的な存在者となります。

そこで、現代はどういう時代かというと、技術の時代です。すべてが、技術によって生産されるような生産品、役立つもの——これはベシユタント (Bestand)、  
「用材」と言われていますが——、その用材として仕立て上げられていく。技術社会というものが、消費のためとか、人間の利便のために、ありとあらゆる自然資源・人的資源を、役立つものの、用材として組み込んでいく。これを、ハイデガーは「総駆りたて体制」、ゲシユテル (Geshalt) と呼びました。人間も自然も、あらゆるものを駆りたてて、用材、商品、役立つものにして

いく。そういう体制が、技術社会の神である。だから、あらゆるものは用材として意味づけられ、用材とならない存在者は、廃材として捨てられてしまうということです。人間的廃材とされたのが、先ほど申し上げたナチスにおける「生きる資格がない」生命です。

このように、「存在―神―論」というのは、何らかの全体の中に組み込まれないものは意味がないとする全体主義的傾向をもちます。ある全体――法則体系であれ、用材のシステムであれ、生成の繰り返しであれ、技術社会であれ、その全体にとって意味がないものは廃材とされて捨てられるわけです。全体の中に組み込まれてはじめて個々のものは意味、価値をもつ存在として認められる。これが全体主義的思想であり、こういうものが現象としてのアウシュヴィッツを担い、思考力、判断力を人間から全部奪ってしまうような機構を形成したと言ってもいいわけです。

### 3 超克の手がかり…エヒエロギア

それでは、これをどう超克するかという問題です。

その手がかりとして「エヒエロギア (Ehyehlogia)」という話をしたいと思います。

#### 自己を超出する「エヒエ」

『旧約聖書』に「エクソダス」(出エジプト記)という書があります。

「創世記」の次に置かれていて、内容としては、ヤウエという神様が、自ら救いを約束した人々がエジプト帝国で奴隷になっていて、その苦しい声を耳にしました。そこで、モーセという男に「おまえ、助っ人になってくれ。奴隷たちの解放のために預言者として働いてくれ」と呼びかけるわけです。ところがモーセは、自分はとてもそれに値しない人間だと尻込みしてしまいます。そこで神は「私はあなたと共にいる」と励まします。「いる」というのは、shyvaエヒエという動詞ですが、「私がいつも一緒にいるから、何とかやつてくれ」と言う。モーセは承諾したものの、「私が彼らのところに行って呼びかけても、おそらく彼らは信用しないで、あなた(神様)の名前を聞くでしょう。私は何

と答えればいいですか」と尋ねます。

名前というのは、その存在のもつ力を担っているものです。昔、日本でも「言霊」といって、言葉とか名前そのものが、ある力をもっていると考えられていました。そういう意味で、古代社会では、言葉は実体的な力をもっているわけです。神道でいえば祝詞とかです。私の実家は神道系が半分入っているもので、親父などは祝詞文化で育っていて、よく「今年、家内安全、商売繁盛、みんな健康であるように」とか神官に祝詞を頼んでいました。モーセが神に「あなたの名前を教えてください。その名を奴隷たちに教えます」と言っているのは、神の名前は力をもっていますから、その神名を呼ぶことによって、願いごとが叶うわけです。神様を自分たちの利益のために用いることができる。一種の魔術的関係ですね。こういう含意をもって、モーセは神の名前を尋ねたわけです。

奴隷たちは神の名を手中にすることによって、いざとなると神頼みをして何かやってもらおうようになるわけですから、神名を呼んだり、尋ねたりすることは一

種のタブーでもありました。ところが、神はモーセに自分の名前を教えます。ここで明かされた名前が「エヒエ・アシエル・エヒエ」(省略的ローマ字表記は *ehieh ashiel ehieh*)。エヒエというのは一人称単数の未完了形です。アシエルは関係詞で、そのあとにまたエヒエが続きます。これは翻訳しがたい名前で、「私は在るだろう。だから、私は在るだろう」とか「私は、在ろうとして在るだろう」などと翻訳されています。ヘブライ語はインド・ヨーロッパ語の英語やギリシャ語と違って、動詞は時制によって区別されません。ドイツ語やフランス語の勉強で時制の変化で頭を悩ませた経験があたりだと思いますが、ヘブライ語は、ある行為が未完了のときに動詞の未完了を使う。ある行為がすでに終わったと見なされるときは、完了形を使います。ですから、将来、ある行為は必ず終わるという場合は完了形を使い、過去でも行為が未完了の場合には未完了形を使うわけです。

ちなみに、シェリングは前期シェリングと後期シェリングに分かれますが、後期シェリングはヘブライ思

想の影響を受けており、この部分をドイツ語で Ich bin, der ich war, Ich war, der ich seyn werde, Ich werde seyn, der ich bin (私は在る。私は、しかし在ったのだ。私は在った。しかし、私は在るだろう。私は在るだろう。しかし、私はいま在る)と解釈しています。

ヨーロッパの「存在―神―論」では、アリストテレス以来、「存在とは何か」というと、それは実体であると言います。実体は、そのものの中で一番動かない、自己同一性を保証する存在の核みたいなものです。最高の実体は神で、第一実体。スピノザでも誰でも「神」といえば第一実体であり、自己原因であるというのが形而上学のひとつの要になっています。

それに対して、エヒイエは未完了です。絶えず自分から超出して、自分から出て他者の世界に向かっていく。神は、奴隷という最も弱い他者に向けて、その解放のために、自分から超え出てモーセに呼びかけ、人間の歴史の中にコミットしていきます。「十戒」という映画でも描かれています。その後、シナイ山のふもとで民と契約を結んで新しい歴史をつくる。奴隷だっ

た人々が自立した自由な民として共同体をつくって、お互いに他者と認め合う。そのような変革をもたらすのが、エヒイエのもっている性格です。ダイナミックに、他者の世界に行って人間を解放するという働きです。この「エヒイエ」についての思惟、解釈が「エヒイエロギア」です。

### 「エヒイエの体現者」イエス

これは抽象的な話で終わるのではなく、「エヒイエの体現者」として、いろいろな人たちがいます。イエスもその一人です。その一例として、「マタイ福音書」の一八章二一節から三五節の「無慈悲な僕の譬え<sup>しもへ</sup>」をご紹介します。ペトロという直弟子がイエスに質問します。兄弟が自分に対して罪を犯したら、何度まで赦し、和解すべきでしょうかと。「七回赦したらいいのですか」。すると、イエスは「七回の七十倍赦せ」と言うのです。その際に、この譬えが語られます。

ある王様から、ある僕が一万タラントンの借金をした。返せないで、王様にひれ伏して、待ってほしい

と頼んだ。王様は赦してあげ、待つことにした。赦された僕は、その帰途、自分がお金を貸している友人に会ったので、「金を返せ」と迫った。百デナリオンというわずかなお金でした。友人は「返せないから待ってくれ」と言いますが、この僕は赦さず、友人の首を絞めて、借金を返すまで牢に入れてしまった。これを知って王様は怒って、この無慈悲な僕を同じように牢に入れてしまうわけです。一万タラントンというのは誇張法で、当時の「二十万年分の給料」という計算になります。ローマ皇帝でも持っていないかもしれない巨額なお金です。つまり、「七の七十倍赦す」というのは二十万年分の給料という莫大な借金を赦すという無限ともいべき赦しなのです。それが神の人間の罪に対する赦しであるということです。

以上は数字で理解された赦しですが、内容的・物語上はどう理解できるのでしょうか。絵を見ていただくとわかりやすいと思います。これは十一世紀ドイツのエンブレム（象徴画）です。聖書のこの譬えに関して、ある解釈を絵の形で残しているわけです。左と右がふ

たつのシーンになっています。左のほうは、一万タラントンを赦してほしいと言って、僕が王様に額づいてる。右のほうは、赦された僕が、金を貸した同胞の首を絞めている図です。これは不思議な絵で、王様の目はどこを向いているかというと、普通なら、赦して



「無慈悲な僕（しもべ）の譬え」を描いたエンブレム（象徴画）。1000年～1040年頃、ドイツのライヒェナウ修道院で作成された「ライヒェナウ福音書」の一部（ミュンヘン、バイエルン州立図書館蔵）



くれと願う人のほう、つまり下のほうを見るでしょう。ところが、王様は、次のシーンを見ている。これは非常に奇妙です。もうひとつ不思議なのは、王様の顔と首を絞められている人の顔が似ていると思いませんか。王様の冠とマントを取ってみると、見分けがつかないくらいです。

これらの謎について、結論だけ説明しますと、王様というのはイエスです。また、首を絞められている男もイエスです。イエスは、その生涯のあいだ、いろいろな人と出会って、いろいろな人を救し、いろいろな人と共に新しい世界をつくろうとしました。みんなが、他者として協力し合う世界をつくろうとした。特に、罪人と言われる人たちと素晴らしい世界をつくろうとしたわけです。イエスは、徳に満ちて人格圓滿な人というよりも、むしろ当時の人々は「大酒飲み、大食い」と呼んでいました（マタイ一・一九「人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う」、新共同訳）。酒は飲むし、よく食べた。罪人とか穢れた者と言われた人たちと一緒に食事もし

た。そういう食事の仕方は当時の聖・清浄を重要視するユダヤ教では禁止されていたものです。だから彼は異端とされます。イエスは磔刑を受けたとき、鞭打たれて出血した後、十字架を背負わされて歩きました。途中、三度倒れましたが、かなり体力のある人です。体格も、あるいは一八〇センチぐらいあったかもしれません。そのイエスが、民衆の中でそういう生活をしました。

しかし、彼が十字架につけられたときに、ピラトというローマの総督が、二人のうち一人の罪人を恩赦するから、バラバという盗賊とイエスとどちらかを選べと民衆に告げると、民衆は盗賊のほうを選んだ。もちろん、民衆は大祭司だとか当局側のいろいろな人間にあり立てられていた面もあるでしょうが、「バラバを赦せ。イエスを十字架にかけろ」と叫んだ。その民衆の中には、イエスのもとで食事をしていた罪人もまじっていたかもしれません。イエスは、「穢れた人」とも一緒に食事をすることで正統ユダヤ教の聖なる世界に刃向かっていったわけですが、そのイエスを十字架につ

けたのは、彼が愛した民衆だったのです。

だから、この譬えでイエスの言っている赦しは、自分是一万タラントンの借金の男を赦す。しかし、その男は、次の瞬間には、自分の首を絞めるだろう、そう知っている。自分に害をなすことを知りながら相手を赦す、これが「七度の七十倍」です。普通の人間には、とてもそんなことはできないわけです。和解するだけでも大変です、我々の日々の生活では。相手がいつか自分に悪いことをするだろう、刃向かうだろうと知りながら、しかも赦すということは、人間業ではほぼ不可能でしょう。

そこに「エヒエ」の働きがあります。つまり、神について天上の不変不動で全知全能の絶対者というイメージが全部打ち壊されて、神自ら奴隷のところまで行く。もちろんモーセを媒介としてですが、あえて「奴隷のような他者と共に生きよう」とする。そういうエヒエを、イエスが体現しているということです。普通の神学ではちょっと考えられない働きです。伝統的なヨーロッパの形而上学や存在神学での神のイメージ

とは、まったく違います。

こういう「エヒエ的人格」の現代的な体現者として、マハトマ・ガンジーを中心として、ガンジーを尊敬し、あるいはガンジーの影響を受けたキング牧師や、ネルソン・マンデラ、ダライ・ラマの名前を挙げておきたいと思います。

### むずびとひらき

きょうお話しましたのは「存在・神・論」が全体主義の根本的傾向を運び、その「全体」にとつての異物とされる他者の抹殺にまで至る危険性をもつこと、それを超える思想的な手がかりとしての「エヒエロギア」、その思想的な面と、それを具体的に体現して現代世界に生きている人たちが公には隠れていても多数あるということ、でした。

「根源悪」の現象については、きょうはアウシュヴィッツに焦点を置きましたが、現代における代表的現象のひとつは「巨大科学」ではないかと思っています。原子力エネルギーを利用した核兵器や原発ですね、あ

あいいうものをつくるためには莫大な富と知と権力が一極集中する。そのために巨大大科学（技術）は、良心的科学者の手からさえ離れてしまいました。そして、いわば全体主義的な機構になってしまい、ホモ・アトムクス（原子力人間）を生み、生身の人間など押しつぶして進む、そういう極めて危険な性格をもっているわけです。

私がやろうとしているのは、そのように、いろいろなところに現れている「根源悪的現象」を探究して、それをお互いに自覚していこうということであり、それを超克するための思想をさらに練り上げていくということです。その思想も、単なる抽象的な哲学ではなく、特に「物語り」として、「他者との関わりの物語り」というかたちで具体化していくことが必要ではないか。そのために、エヒイエの実践への呼び声を真摯に聞くことが大切なのではないか。私自身はそうように考えております。

（みやもと ひさお／東京純心大学教授・  
東京大学名誉教授）

※2015年10月27日に行われました。